

濁流の中で2時間 災害体験を振り返って…

平山通隆さん・道子さん（穂積）



穂積地区を流れる四ツ川添いに住んでいる平山さん夫妻は当時、今は亡き父の久さんと当時小学3年生だった息子の翔太さんの4人家族で、自宅で被災しました。

27日の午前4時頃、久さんに起こされ自宅裏を確認すると、川の水位は上がっていたものの水は澄んでいて危険性はさほど感じなかったそうです。しかしその10分後、

四ツ川が一気に氾濫し鉄砲水が平山さん宅を襲いました。裏戸のガラスが割れると同時に濁流が家中に流れ込み、ものの数分で水位が上ががり2メートルほどになったといえます。幸いにも濁流は茶の間を避けて廊下を流れていったため、久さんと道子さん、翔太さんは茶の間の柱につかまり助けを待つことができました。「じいちゃんにサッシを全部開けると言われて、そうしたのがよかったです」と道子さんは振り返ります。道子さんは「無我夢中で茶の間の柱につかまり、もう片方の手で、動こうとする父をつかみました。茶の間の反対側から息子が泣いている声が聞こえてきて、息子がいる方は自分たちがいるところより水が少なかったから『翔太そこにいろよ』と声をかけ続けました」と混乱の中のことを話してくれました。通

隆さんは玄関で、背中に濁流を受けながら下駄箱を押さえ続けていたそうです。「下駄箱が流れると玄関先の車も一緒に流れて行っちゃうと思ったから。車は結局ダメになったけど、あの時は必死だった」と振り返りました。

午前6時過ぎ、家族は近隣住民の協力によって救助されました。水量は少なくなってきたものの家から出ることはできず、工務店を営む住民が油圧ショベルで駆けつけ、窓から一人ずつバケツト部分に乗せられ、家から助けられました。「本当に長い2時間だった。でも4人みんなが助かってよかった」と振り返りました。

地区の公民館で半月ほど避難所生活を送り、自宅敷地内に作った仮設住宅で生活をはじめてから復旧作業を本格的に開始。飼育していた和牛が1頭流されたが1カ月ぶりに見つかったこと、職場の仲間たちが納屋を修理してくれたこと。高校生30名がボランティアで水田のゴミを片付けてくれたこと。その中で流された婚約指輪を見つけてくれたことなど、被災生活での数々の思い出を笑顔で話してくれました。「人間を生かすも殺すも水しだい」という久さんの言葉を思い出し、20年が経った今、命あるからこそこうして笑って話せる喜びをかみしめるお二人でした。

防災意識を高め 自分の命を守ろう

東陽小学校児童が那須水害について学びました

那須水害から20年目を迎える今年、町教育委員会では地域特性に応じた防災・減災教育を発達段階に応じて取り組んでいます。

7月12日、東陽小学校で4年生を対象に「大雨で起こる災害と危険地域を正しく知ろう」をテーマに公開授業が実施されました。

授業では那須水害のビデオを通して当時はどんな状況だったのか、また大雨の怖さは何かを学び、感じたことや家族から水害の時に困ったことなど聞き取ったことを発表しました。そして、那須町防災マップ（ハザードマップ）を用いて川の氾濫やがけ崩れ、土石流など予想される災害や、災害が起きたらどうするかを考えるグループで話し合いました。



また、同日3年生から6年生を対象に実施された防災講習会では、災害時に現地の情報収集するドローンの操作や放水銃の実演などが行われました。土石流対策模型の展示では児童たちが大田原土木事務所職員から砂防えん堤の役割の説明を受けました。また、水防工法（土の作成）では、袋の縛り方を那須消防署の消防士から教えてもらいながら一緒に土のうを作り、児童たちは自分で作った土のうを一生懸命運びました。



深谷校長は「授業や講習会で学んだことを家族と話し合い、災害時にはまず命を守ることを最優先に考え、今日の経験を活かし役立ててほしい」と子どもたちに伝えました。